

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	講師	氏名	南津 佳広
調査研究課題	通訳訓練手法を応用した即応的な英語スピーキングとライティングの訓練に関する研究					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	南津佳広	保健福祉学部 保健福祉学科 講師	通訳翻訳学・英語学	ループリックの作成、データ収集、データベースの構築、分析	
調査研究組織	分担者					
調査研究実績の概要	<p>日本における学部レベルの英語教育では、日常的な挨拶レベルを超えた即応的なスピーキングとライティング（言語産出）の指導法をめぐり試行錯誤状態にある。その現状には看過できない問題がある。その理由は以下の3つに収斂される：①通常の言語産出では、頭の中で明確に構造化されていない言語産出プランを、オンラインで構造化しながら言語化していることまでは明らかになっているが、その具体的なメカニズムとプロセスは未だ解明されておらず、言語理解のプロセスモデルを敷衍しているに過ぎない（Levelt 1993 参照）。②日本人英語学習者は、既に「思考の言語」としての母語（日本語）を獲得しており、英語母語話者のように「英語で考える」ことは生態的に不可能である（Cook 2003 参照）。③母語としての日本語を排斥した授業の運営は、日本人英語学習者の実態や主体性を無視しており、学習者は一種の「知的空白状態」に置かれ、学習の自己効力感を阻害してしまう（染谷 2010 参照）。</p> <p>本研究では、日本の学部レベルにおける英語教育でのスピーキングとライティング指導における上述した問題点の解決策のひとつとして、欧州の言語教育で2010年頃から提唱されているTILT（Translation in Language Teaching：言語教育としての通訳翻訳）を参照し、逐次通訳訓練で行われるノートテーキング（「メモ」）の訓練手法を応用し、即応的に英語を産出する訓練に導入した。この方法は、<u>人間の言語産出の基本的なメカニズムに合致したものであり、英語により言語産出を訓練する方法として、認知的プロセスと十分な整合性がある</u>。そこで、本研究では、ELP 2 & 4にて以下の手順で通訳メモの方法を導入した。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 「言語産出プラン」となる「メモ」の訓練の導入 ② 「メモ」をもとに、制限時間内でエッセイライティングを行う（*即応性を高め、言語産出の自動化を促す） ③ 完成したエッセイを学生同士でピア・レビューをさせる。 （*必要に応じてFocus on Formを導入し文法の適格性を客観的に分析する力を養うとともに、独自に開発したループリックに沿った論理的な構成を客観的に分析する力を養う） ④ ピア・レビューの結果をもとに、「メモ」に修正を加えさせる ⑤ 修正した「メモ」を制限時間内でスピーキングをさせ、録音する（*即応性を高め、言語産出の自動化を促す） ⑥ 録音したスピーチのピア・レビューを行い、必要に応じて再度録音をし直し、送信する。 					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>なお、Essayのcorrection codeとrubric、Re-writeシート、自己調整理論に基づき、学生が自律的にPDAサイクルに則ってスキルを習得できるように授業の振り返りログを独自に開発して毎授業に用いた。</p> <p>独自に開発したCorrection Codeを用いて、学生が制限時間内で書いたエッセイな文法的なミス排除可能なようにピアで指摘だけ行い、Rubricを用いて16点満点でエッセイを評価させた。その指摘をもとに、制限時間内でリライトさせて録音へと移った。</p> <p>また、授業の振り返りログでは、授業での学習内容の理解内容を整理するために、教員側からその日の授業内容のポイントを3つに絞り込み、その理解度を「○・△・×」で評価させるようにした。その上で、毎授業を受けて学生が独自に課題を設定し、その達成度を翌週振り返ることができるように、またその達成度の理由を記述させるようにした。</p> <p>学生が毎回作成したエッセイ用のメモとエッセイを比較した上で、学習振り返りログをテキスト・マイニングにかけた結果を比較分析した。その結果は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学習ログの自分自身への課題の戦略を記述する際に、具体的に「何を・どのように」と記述できない学生が多く、英語学習において自分自身にとって何が不足しているのかを客観的に把握出来ていない学生がいた。 ② Correction Codeを用いたピアのチェックとリライトを導入することで、日本人学生が苦手とする冠詞の使い方のミスを減らし、積極的にパラフレーズを行うことができるようになった。 ③ Narrativeなエッセイを書く際に、主観的な形容詞、副詞を多用する傾向にあるが、日本語の作文では、主観的な表現単体でも妥当と評価されるが、英語では主観的な表現を用いる観点・側面の記述をする必要がある。授業振り返りログで自分自身の課題を具体的に記述できない学生は、授業回数を重ねても、この癖を克服することができなかったため、教員による介入が必要であった。 ④ descriptive、expositoryな内容のエッセイを書く際に、controlling ideaを設定する段階でつまづき、それに則った論拠を出すことができない学生が目立った。授業振り返りログで具体的な課題の記述ができない学生は、この弱点を克服することが困難であり、教員が介入を行っても克服できなかった学生もいた。 ⑤ 即応的に発話プランを考え、エッセイを書き、発話するプロセスは、結局のところ、授業振り返りシートにて客観的に振り返り、詳細に記述できるメタ言語能力との相関性が認められた。 <p>今後は、メタ言語能力の開発と即応的な発話産出の関係に焦点を絞り、知見を深める予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>日本メディア英語学会 第6回年次大会（東京学芸大学）発表資料</p>